

近くの馬小屋のやうなガランとした家だ。

若い事務員が二三人居た。

火鉢にガンガン／＼炭火を起してあたゝまる。

局長か巡查だつたか知らんが、其の男が色々と氣嫌をとつて、散財の話や遊廓の話をしもつて、伊豫節やピンホツを唄つて聞かしたりした。

村の女房達や子供等が集つて來て覗く。

すると長者の家の女中が膳を連んで來た。

奥に疊を敷いた間があるので、其處で雜煮を食べなさいと言ふのだ。

カンピンを持つてゐる。

僕は仕方がないので、寸時奇麗な其の女中に、酌をさせ乍ら飲んだ。

人蔘や牛蒡や、かずの子やにまめ、かまほこ位なもので、別に大した御馳走もない。

まつとうまいものがあるだろうと言つても、天麩羅しか持つて來ない。

かはりのカンピンを二本ばかり飲んで、僕は雜煮を三杯ばかり食べた。